

平成 31 年 4 月 22 日現在

機関番号：32621

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2016～2018

課題番号：15KK0055

研究課題名（和文）ライシテ（非宗教性）と宗教の公共性 - フランス、ケベック、日本を事例として（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Secularism (Laicity) and Public role of Religion : Comparative Studies of France, Quebec and Japan(Fostering Joint International Research)

研究代表者

伊達 聖伸 (DATE, Kiyonobu)

上智大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90550004

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,200,000円

渡航期間： 12ヶ月

研究成果の概要（和文）：フランス、ケベック、日本をフィールドとする本研究では、「フランス独自の厳格な政教分離」と思われがちなライシテについて、その時間的・空間的広がりを意識して通念を相対化し、世俗と宗教の関係を再検討した。ケベックにおける長期滞在を活かして、おもにフランスのライシテの歴史と現状に関する書物を刊行し、ケベックの宗教教育とヴェール問題に関する最新の状況を整理して示し、日本の政教関係をフランスやケベックと比較するための視点を磨いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「フランス独自の厳格な政教分離」と思われがちなライシテに宗教の公共性を認める側面があること、またライシテがフランス以外の社会の政教関係を再検討するための一視点になりうることを、多くの読者が手に取りやすい新書を発表して示した。

また、フランスとケベックのライシテ研究に加えて、日本の政教関係をライシテの観点から捉え返す研究をおもにフランス語で発信することにより、比較の視点を洗練させるとともに、フランス語圏の研究者とのさらなるネットワークを構築することができた。

研究成果の概要（英文）：The concept of “laicity” (secularism) is generally defined as a “rigid separation of politics and religions which is unique to France.” Focusing on France, Quebec, and Japan, this study reexamined the relationship between the secular and the religious across different historical contexts and different countries from a comparative perspective. Taking advantage of my long stay in Quebec, I published a book on the history and actuality of French laicity, studied the latest situation surrounding religious education and Muslim women’s veil problems in Quebec, and reassessed the relationship between religion and politics in Japan, comparing it with those in France and Quebec.

研究分野：宗教学

キーワード：ライシテ 政教分離 フランス；ケベック；日本 宗教学 地域研究

1. 研究開始当初の背景

しばしばフランス独自と言われる「ライシテ」(非宗教性、政教分離、世俗主義)を共生社会の原理として再構成するには、その歴史と現状についての批判的再検討と、ライシテを「脱フランス化」してより広い観点から考えることが欠かせない。特に、同じフランス語圏でありながら、フランスとは来歴の異なるケベックのライシテについて研究を深めることで、日本にも示唆を与えうるような比較の視点をいっそう洗練させる必要があるというのが、研究開始当初の背景にあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「ライシテ」という言葉を手がかりに、フランス、ケベック、日本をフィールドとして、宗教の公共性に注目しながら近現代の政教関係について批判的な再検討を加えることにあった。より具体的な解明や研究の深化を目指したのは、以下の点である。(1)フランスの歴史のなかで諸宗教が果たしてきた公共的役割を見直し、社会空間における「宗教」の位置を再考察すること。(2)現代ケベック社会における宗教と世俗をめぐる現象を、ケベックの宗教史の文脈に位置づけること。(3)フランスやケベックとは宗教的伝統の異なる日本を、ライシテの比較研究のなかに適切に位置づけること。

3. 研究の方法

理論的仮説の構築と修正、資料(学校の教科書から裁判の記録まで)と文献の読み込みを有効に組み合わせ、必要に応じてフィールドワークも取り入れる包括的アプローチを用いる。フランス語圏の研究動向を押さえつつ日本の政教関係をライシテの観点から読み直すことに鑑み、フランス、ケベックのことはおもに日本語で、日本のことはおもにフランス語で発信することを念頭に置く。

「宗教」概念の歴史的・地域的拘束性を踏まえた観点から、社会の議論の言説分析を行なう。フランスとケベックの比較においては、主たる海外共同研究者であるケベック大学モンレアル校(UQAM)教授でモンレアル大学連合民俗学研究センター(CEETUM)のミシュリーヌ・ミロ教授の協力もおおきながら、特に共和主義と間文化主義の成り立ちの違いに注目する。

4. 研究成果

(1) 厳格な政教分離のイメージがつきまとうフランスのライシテについては、歴史のなかで諸宗教が果たしてきた公共的役割を見直すとともに、現代社会におけるさまざまな課題を整理した。小著ながら、人びとが広くアクセスできる単著にまとめることができたのは大きな成果である(5〔図書〕の『ライシテから読む現代フランス』)。

(2) ケベックへの長期滞在を活かして、またミシュリーヌ・ミロ教授との共同研究を通して、現代ケベック社会における世俗と宗教をめぐる課題の重層的な歴史的背景を具体的に知ることができ、将来の研究の大きな見通しを立てることができた。学校での宗教教育をめぐる論争を整理した(5〔雑誌論文〕の)。イスラームのヴェールをめぐる社会の論争を整理することができた(5〔雑誌論文〕の)。ケベックの宗教をめぐる国際会議に参加して、20世紀後半以降のケベックと日本を比較する発表を行ない(5〔学会発表〕の)。ケベックの研究者とのネットワークを築くことができた。また、ナショナリズムと現代社会の背後にある神話の比較検討が二つの社会の分析を掘り下げのに有効であることについて理解を深め、論考を発表した。(5〔雑誌論文〕の)。

(3) それぞれの社会における「宗教」概念には独自の特徴があるように、「宗教の自由」(信教の自由)も歴史的・地理的にそのあり方が異なっていることについて知見を深め、ケベックおよびカナダの宗教の自由の特徴について論じた。ケベックをフランスとの比較だけでなく、イギリス、アメリカ、英語系カナダと比較するための見通しを得ることができた(5〔雑誌論文〕の)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者は下線)

〔雑誌論文〕(計 11 件)

伊達聖伸「現代ケベックにおける「宗教の自由」——法廷は西洋的「宗教」概念を再強化するのか」『アメリカ・カナダ研究』36号(2018年度)、上智大学アメリカ・カナダ研究所、2019年、39~62頁(査読有)。

DATE Kiyonobu, « Des mythes nationaux du Japon contemporain : Entre le besoin de démythification et de déconstruction », *Bulletin of the Faculty of Foreign Studies, Sophia University*, No.53 (2018), 2019, pp.157-179. (査読無)

伊達聖伸「ケベックのヴェール論争——争点の移動と対決の構図」『思想』1134号、2018

年 10 月、38～58 頁（査読無）。

伊達聖伸「論争のなかの「倫理・宗教文化」教育 近年の議論の動向と公共空間における「宗教」の位置」『ケベック研究』第 10 号、2018 年、19～32 頁（査読有）。

伊達聖伸「カトリシズムとセクシュアル・デモクラシー フランスの同性婚反対運動とライシテ」『上智ヨーロッパ研究』10、2018 年（2017 年度）、47～66 頁（査読無）。

伊達聖伸「フランス、ベルギー、ケベックのライシテを比較する 成り立ちと現在の課題から」『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』第 21 号（別冊）、2017 年、63～83 頁（査読無）。

伊達聖伸「アブデヌール・ピダールにおけるライシテとイスラーム」『フランス哲学・思想研究』第 22 号、2017 年、42～53 頁（査読無）。

伊達聖伸「フランスにおけるムスリムとの共生 アブダル・マリクの場合」『神奈川大学評論』86 号、2017 年 3 月、169～175 頁（査読無）。

DATE Kiyonobu, ““Religious Revival” in the Political World in Contemporary Japan with Special Reference to Religious Groups and Political Parties,” *Journal of Religion In Japan*, Volume 5, 2016, pp.111-135（査読有）。

伊達聖伸「ケベックにおける間文化主義的なライシテ その誕生と試練（下）」『思想』1111 号、2016 年 11 月、137～154 頁（査読無）。

伊達聖伸「ケベックにおける間文化主義的なライシテ その誕生と試練（上）」『思想』1110 号、2016 年 10 月、6～28 頁（査読無）。

〔学会発表〕（計 20 件）

DATE Kiyonobu, « La notion de « religion » dans la cour de justice : une étude comparée entre le Québec et le Japon », Lectures critiques sur la religion, le droit et la théorie en sciences sociales, Université Ottawa, le 7 mars 2019.

DATE Kiyonobu, « Les mythes nationaux dans le Japon de l'après-guerre », EHESS, le 21 février 2019.

伊達聖伸「現代ケベックの法と宗教 西洋近代的「宗教」概念を再生産する法廷の彼方へ」上智大学実践宗教学コロキウム、上智大学、2019 年 1 月 25 日

伊達聖伸「フランスのポストセクラー」京都フォーラム「ポスト世俗化時代の宗教を構想する」、大阪リーガロイヤルホテル、2018 年 10 月 20 日

DATE Kiyonobu, « Quelques aspects des mythes nationaux du Japon contemporain », Symposium Mythes et nations dans les sociétés contemporaines, Congrès annuel de l'Association japonaise des Études québécoises, Université Aichi, 13 octobre 2018.

伊達聖伸「ケベックのインターカルチュラリズム」日本カナダ学会第 43 回年次研究大会、神戸国際大学、2018 年 9 月 15 日（シンポジウム「マルチカルチュラリズムとインターカルチュラリズム」にて発表）

伊達聖伸「ケベックにおけるイスラームのヴェール問題」モントリオール・アカデミー会、McGill University、2018 年 3 月 2 日

DATE Kiyonobu, « Pourquoi étudier la laïcité au Québec ? Le regard d'un chercheur japonais », Symposium Étudier la religion au Québec : Regard d'ici et d'ailleurs, Université du Québec à Montréal, 1 décembre 2017.

DATE Kiyonobu, « La mise en perspective de la laïcité québécoise et la laïcité

japonaise », Conférence publique du Centre de recherche Société, Droit et Religions (SODRUS), Université de Sherbrooke, 25 octobre 2017.

DATE Kiyonobu, « Quelle tolérance pour lutter contre la radicalisation ? : Une lecture de Voltaire au prisme de la situation japonaise », Midis-conférences du CRIDAQ (Centre de recherche interdisciplinaire sur la diversité et la démocratie), Université Laval, 18 octobre 2017.

伊達聖伸「ケベックの倫理・宗教文化教育をめぐる近年の論争」第76回日本宗教学会、東京大学、2017年9月17日

DATE Kiyonobu, « Genèse de la laïcité interculturelle au Québec et sa remise en cause », 31^e Congrès du CIEF, Martinique, Université des Antilles, le 30 juin 2017.

伊達聖伸「アブデヌール・ピダールにおけるライシテとイスラーム」日仏哲学会シンポジウム「移民」、立命館大学、2017年3月18日

伊達聖伸「フランス、ベルギー、ケベックのライシテを比較する 成り立ちと現在の課題から」シンポジウム「社会における脱宗教（ライシテ）について考える フランス、ベルギーそしてケベック（カナダ）」金城学院大学キリスト教文化研究所、2017年1月21日

伊達聖伸「宗教化する政治？ 宗教的なものの軌跡と日仏社会の危機」日仏会館、2016年11月19日（日仏文化講座「危機に立ち向かう人文社会科学」にて発表）

伊達聖伸「ポール・ベニシュー『預言者の時代』をめぐる」第41回社会思想史学会、中央大学後楽園キャンパス、2016年10月30日（シンポジウム「3つの世紀のポール・ベニシュー ユートピア、ライシテ、文学」にて発表）

伊達聖伸「フランスにおけるムスリムとの共生 アブダル・マリクの場合」神奈川大学人文学研究所主催公開シンポジウム「ホスピタリティと人文学の役割 足元からの多文化共生」、神奈川大学、2016年10月15日

伊達聖伸「ヴェール論争とフェミニストの分裂 「ケベック価値憲章」をめぐる」日本ケベック学会2016年度全国大会、明治大学、2016年10月8日（シンポジウム「ケベック社会と女性」にて発表）

伊達聖伸「現代ケベックにおける複数のライシテ観の競合と信教の自由」第75回日本宗教学会、早稲田大学、2016年9月11日（パネル「信教の自由」のパラドクス 単線的進歩史観を越えて」にて発表）

伊達聖伸「フェルナン・デュモン『記憶の未来』を読む」ケベック学会研究会、立教大学、2016年7月2日

〔図書〕(計8件)

池澤優編『政治化する宗教、宗教化する政治』(いま宗教に向きあう4世界編II)岩波書店、2019年(伊達聖伸「欧州人権裁判所におけるヴェールと十字架 イスラームに向きあう世俗的ヨーロッパのキリスト教的な系譜」100~116頁を執筆)

剣持久木編『よくわかるフランス近現代史』ミネルヴァ書房、2018年(伊達聖伸「ヴォルテールと寛容」18~19頁「ライシテの確立 コンコルダートから政教分離法へ」92~95頁「ライシテの現在 反スカーフ法とブルキニ論争」184~185頁を執筆)

伊達聖伸『ライシテから読む現代フランス 政治と宗教のいま』岩波新書、2018年、iv+243頁。

柴田大輔・中町信孝編『イスラームは特殊か 西アジアの宗教と政治の系譜』勁草書房、2018年（伊達聖伸「宗教的なもの」をとらえ返す近現代フランスと「西アジア」に対する眼差し マルセル・ゴーシェ、ルイ・マシニョン、ムハンマド・アルクーン」1～31頁を執筆）

福井憲彦編『対立する国家と学問 危機に立ち向かう人文社会科学』勉誠出版、2018年（伊達聖伸「宗教的なものの軌跡から見る現代社会の危機 日仏比較を通して」93～127頁を執筆）

ジェラルド・ブシャール^{インターカルチュラルイズム}『間文化主義 多文化共生の新しい可能性』丹羽卓・古地順一郎・小松祐子・伊達聖伸・仲村愛訳、彩流社、2017年（283～347頁の翻訳を担当）

Shin Abiko, Hisashi Fujita, Yasuhiko Sugimura eds., *Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIX^e siècle*, Hildesheim, OLMS, 2017. (DATE Kiyonobu, « L'amour pour principe, la durée pour base, la création pour but ? » Quelques points de convergence entre Comte et Bergson », pp. 141-155.)

Valentine Zuber, Patrick Cabanel et Raphaël Liogier (sous la direction de), *Croire, s'engager, chercher : Autour de Jean Baubérot, du protestantisme à la laïcité*, Turnhout, Brepols, 2016. (DATE Kiyonobu, « Kishimoto Hideo et la laïcité du Japon : Parcours d'un chercheur japonais en sciences religieuses de l'après-guerre », pp.407-422.)

6 . 研究組織

研究協力者

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕

研究協力者氏名：ミシュリーヌ・ミロ

ローマ字氏名：Micheline MILOT

所属研究機関名：ケベック大学モントリオール校（UQAM）

部局名：社会学部

職名：教授

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。